12 月 19 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　1：　1－14

「わたしたちはその栄光を見た」

イエスの降誕はすでに神が約束されたことでした。そしてそれは、神が先駆者たちに伝えられた言葉の通りに実現します。イエスは先達たちが切り開いた道を通ってこの地上に来られました。私たちの間に宿られました(「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」ヨハネによる福音書 1:14)。その姿は確かに赤ん坊の姿ではありましたが、イエスの姿こそ、神の栄光の反映に他なりません(「御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、……」ヘブライ人への手紙 1:3)。なぜなら、世のあらゆるものと異なって、イエスこそ「わたしの子」であると神自らが宣言なさったからです(「主はわたしに告げられた。『お前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ。』」詩編 2:7、「いったい神は、かつて天使のだれに、／『あなたはわたしの子、／わたしは今日、あなたを産んだ』と言われ」ヘブライ人への手紙 1:5)。他のものとは比較できない存在としてイエスは地上に来られたのです。

また、イエスの誕生は人間にとって、暗闇からの脱出を意味していました(「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」ヨハネによる福音書 1:9)。人々は救いそのものを目にしたはずでした(「彼らは目の当たりに見る／主がシオンに帰られるのを。」イザヤ書 52:8)。

ところが現実には、地上の人々はイエスを受け入れませんでした(「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」ヨハネによる福音書 1:11)。それは、自分たちの期待した救いの形と異なっていたからでしょう。力ある王が現実の政治をひっくり返してくれると期待していましたが、そうはなりませんでした。また、イエスの姿は、人々の思い描く救い主の姿とは似ても似つかなかったからでしょう(「彼の姿は損なわれ、人とは見えず／もはや人の子の面影はない。」イザヤ書 52:14)。この世で小さくされている者、片隅に追いやられている者たちに寄り添われるイエスの生き様を「美しい」とは思えません。

しかし、神の思いは人間とは違います。神にとって美しいとは、見た目の麗しさではありません(「しかし、主はサムエルに言われた。『容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。』」サムエル記上 16:7)。神は言われます。労苦する者たちの足はなんと美しいことかと(「いかに美しいことか／山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。」イザヤ書 52:7)。野山を駆けまわり、良い知らせを伝える者の足は、泥にまみれ、切り傷だらけの足となっているはずです。人間の目から見てその足は、お世辞にも「きれい」「美しい」とは言いにくい足でしょう。しかし、神はその足こそが美しいと言われるのです。

宿屋には居場所がなく、飼い葉桶に寝かされている生まれたばかりのイエスの姿は、人間の考える幸せとは遠く思えます。また、その地上の歩みの終わり、十字架につけられたイエスの姿は、直視できないほど痛々しいものでしょう。しかし、その姿こそが美しいのです。自分のためだけではなく、他者のために働き、他者のために生きるその姿こそが美しいのです。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」(ヨハネによる福音書 1:14)

私たちも今日、その栄光を目撃した一人となりました。「見た」者には多くの喜びがもたらされます。と同時に、今度はその喜びを「伝える」役割へと招かれます。まだ暗闇の中と思えるこのクリスマス、私たちは誰にこの光を、栄光を伝えますか。